

寄託一〇八 塚原哲夫家文書

今回は、小山市の塚原哲夫家文書を紹介します。文書の総点数は三十一点です。当館が寄託ないし寄贈を受けている家の文書点数と比較すると少ない方に属します。しかし、塚原家には戦国期や近世初期小山氏が家臣や旧臣に宛てた貴重な文書が残されており、塚原家は小山氏の旧臣の家柄と言えます。

戦国期の文書としては、永禄期正月三十日付けで孝山（小山秀綱の法名）が越後上杉謙信の家臣に宛てたと思われる書状や、天正三年（一五七五）卯月二十二日付けで孝哲（小山秀綱の法名）が重臣の秦氏に籠城の功を賞し「左馬助」の官途名（官職名）を与えた時の官途状や、日付未詳ですが天正前半期頃のものと思われる孝哲が一族・家臣に宛てた書状があります。

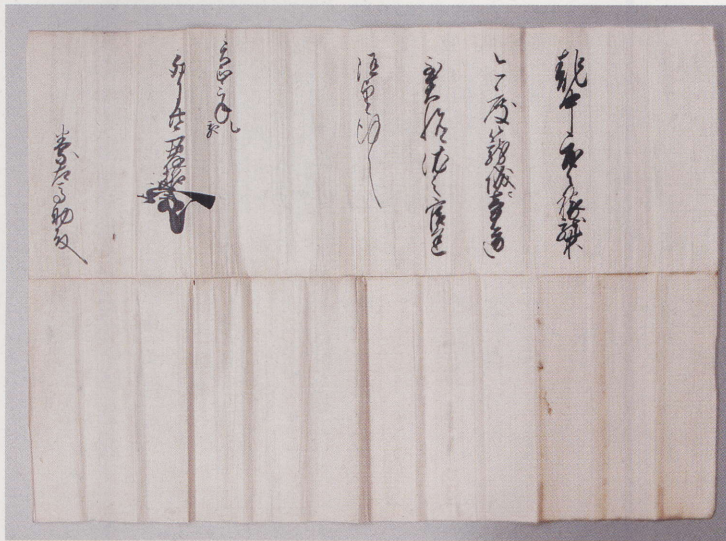
また、近世初期のものには、慶長五年（一六〇〇）正月十五日付けで小山秀綱が旧臣の岩崎氏に官途名を与えた時の官途状の写や、慶長七年正月十五日付けで小山秀綱が旧臣の塚原・小嶋両氏に官途名や受領名（国司名）を与えた時の官途状や受領状の写が残され

ています。小山氏は、天正十八年（一五九〇）の豊臣秀吉の北条氏攻めに際し、北条氏に与したため秀吉により滅ぼされます。しかし、これらの文書からは、戦国期に小山氏が同氏の所領であった小山領や榎本領に土着した旧臣たちによって支えられ、慶長期にはこれらの地域の一隅で浪々の日々を過ごしていたことが推測できます。

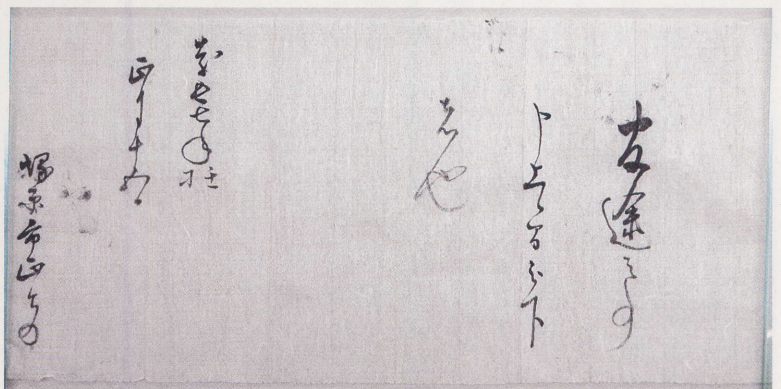
塚原家に残る慶長期の小山秀綱の官途状写や受領状写は私たちに興味深い情報を提供してくれます。塚原・小嶋・岩崎氏など地域の土豪クラスの小山氏の旧臣たちが何を求め、それに対し旧主小山氏がどのように応えたのかという情報です。彼らは、戦国期以来郷村や町場で官途・受領名を名乗ることで家格や由緒を保障され、一般農民や町場の人たちに優位を誇示し、同時に威圧を加えることができました。したがって、旧臣たちにとっては小山氏が戦国期と同様に官途状や受領状を与え続け、お墨付きを与えてくれることを欲していたと言えます。一方、旧主小山氏も、旧臣たちに官途名や受領名を与えることで、小山氏が持っていた伝統的な権威を没落後も保持していくことができ、彼らから礼銭・礼物などを贈られることを期待できたと思われるからです。

このように、塚原哲夫家文書からは、戦国期から近世初期にかけての小山氏の動向や、小山氏と家臣ないし旧臣との関係がわかります。現在塚原哲夫家文書は当館に寄託されています。興味のある方は是非当館でご覧になっていただきたいと思えます。

（荒川 善夫）



孝哲官途状 (No. 1)



小山秀綱カ官途状写 (No. 8)